



政権交代がとうとう起こった。日本社会のシステムの硬直化、老朽化が指摘され始めてから久しい。いずれはと思われていたことである。今回の選挙結果はバブル崩壊後、価値観などの意識が変化した国民が従来の政治の方法論、結果にNOと突きつけたことになる。言い換えれば戦後から続いていた社会のパラダイムが機能不全に陥ったと解釈できないだろうか。

政治家主導の改革、政治のパラダイムシフ

医療のパラダイムシフトは可能か

情報広報部長

山科 賢児

トを目指している民主党を評価するには当然まだ時間がかかる。日本の近代の歴史を振り返るとパラダイムシフトは戦争などの外圧がきっかけになっており、自らの力で改革を行なったことはない。今回の政権交代が国民の主体的意思によって選択されたのか、社会の不安、閉塞感を嫌って消去法的選択によってなされたのか。いずれにしても外圧によって起こったことではない。しかし医療に関して言えば政権交代という外圧が医療情勢に大きく影響し、中医協の構成メンバーの変更に

られるように医療事情は意外に早く変わらざるを得なくなってしまった。

近年、従来からの医療制度の機能不全が明らかになり、新しいパラダイムの構築の必要性は認識されていたが、新しい卒後臨床研修制度の開始が、それを決定的に推し進めることになった。制度そのものを研修医、医療関係者はどう評価するかは別にして、この制度が医療に与えた影響は大きかった。教授の権威の失墜、医局の崩壊、博士号への価値観の変化、地方の医師不足による地域医療の崩壊、科

目別の医師の偏在など、誰もがなんとなく疑問に思い、改善しなければと考えていた問題が、制度が始まり一挙に露呈した。これらの問題を解決す

べく国、自治体、医師会はさまざまな手を打ってきているのは確かであるが、これで解決できそうだという本能的に感じる打開策は打ち出されていない。それは従来のパラダイムの手法を持ち出しているからではないだろうか。医療制度そのものを根底から覆し作り変えなければ解決できない大きな問題と、認識しなければならぬ。

一介の医師会員が書くにはおこがましいが、今の日本に必要な医療は何か、すなわち来るべき新しいパラダイムに向けて何をすればい

いのだろうか。患者が医療を信頼し、正しい医療知識を身につけ適切な医療を選択できること。医師が社会的に信頼され、医療にプライドを持ち診療、研究ができ、若い医師が将来に大志を抱ける環境を作ることではないだろうか。つまり医師、患者双方が自由に主張し、譲るべきことは譲れる、心に余裕のある医療の環境の実現ではないだろうか。

医師会は今必要な医療は何か、医療のプロ集団として何をするのかを国民、メディアに対し、同一目線の立場で示すことが急務である。その実現に向けての改革はできれば自律的に、それも双方向のコミュニケーションのある形をとって行動したい。

しかし改革を実行に移すためには政治、官僚の力の助けは欠かせない。今回の政権交代で気づかされたのは、政党のどちらか一方に寄り寄る二分法では都合が悪いということである。時にはどちらかへの配分を多くしたり少なくしたりする柔軟な戦略が必要なのである。一見、日和見のように思われるが、どちらか一方に組み込んでしまおうとさえ揺らいでしまう。状況は刻々変化するので主張、意見はその都度修正、変化してもよいのではないだろうか。表舞台で絶妙なバランスをとるには水面下では激しく動かなければならない。とても精力的な活動が医師会には要求される。それには、若く優秀な人材の積極的な医師会活動への参加が望まれる。